

日本百街道紀行

街道とまちづくり

第33回

山陰道・出雲街道

「選ばれるまち松江」を目指して

松江市長(島根県)

松浦正敬



はじめに

松江市は、島根県の東部に位置し、北は日本海を望む島根半島、南は宍道湖と中海を挟んで中国山地に挟まれた地域に広がる風光明媚な中核都市である。



八雲本陣と山陰道

出雲神話や豊富な古代遺跡に見られるように、古代には出雲国府、近世には松江城が置かれるなど、山陰地域の政治文化の中心的な役割を果たしてきた。

現在の城下町「松江」の基礎が出来たのは、関ヶ原の合戦後に出雲国に入府した堀尾吉晴・忠氏父子が広瀬の富田城から現在の松江に城地を移したことに始まる。この時に松江城を中心として整備した堀割や街路は、今も松江の都市の骨格を形成し、城下町の景観を伝えている。

街道と松江

山陰地域は古来、道によって都とつながっていた。古代には律令制のもとで日本海沿岸ルートの中陰道が整備され、近世には大名の

参勤交代により、山陽道から中国山地を越えて横断する出雲街道が整備された。街道は、宿場町の発展や、産業や文化交流の隆盛に深く寄与してきた。

現在でも山陰道は宍道湖・中海圏域をつなぐ大動脈であり、出雲街道の近くには山陽地域と結ぶJR伯備線が並走しており、近畿圏を中心とした観光客の利用に供されている。

また、平成29年からはJR西日本本の豪華寝台列車「瑞風」の運行が始まり、山陰地域を周遊する観光客も増加している。乗継駅の一つである宍道駅は、近世山陰道沿いにあり、江戸時代には本陣が置かれ宿場町として栄えた土地柄である。瑞風が到着すると地域住民がホームで小旗を手に歓迎する光景

が見られ、地域ぐるみの取り組みが宿場町の活性化にもつながっている。

茶の湯文化が息づく松江

松江は、お茶どころとして知られている。茶の湯文化の基礎を築



茶室「菅田庵」修理状況



小泉八雲

いたのは、松平家七代藩主治郷（不昧）である。その流儀は今も不昧流として受け継がれており、市民の日常生活にもお茶を飲む習慣として深く根付いている。お茶に関連して焼物や和菓子などの伝統産業に与えた影響も大きい。折しも、平成30年は不昧公の没後200年忌に当たり、不昧公の指図による茶室、重要文化財「菅田庵及び向月亭附御風呂屋」の保存修理事業が所有者により進められているほか、記念茶会や展示会、講演会やイベントの開催など、不昧公の業績や精神を広く発信できる機会となっている。

松江 ラフカディオ・ハーンと

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、明治23年に島根県尋常中



「瑞風」の出迎え風景

「選ばれるまち松江」を目指して

学校の英語教師として松江に赴任した。ハーンは、松江の美しい風景や風情をこよなく愛し、滞在した1年3カ月の間に見聞した城下町松江の風情や、島根半島の美しい自然を文筆によって広く世界に紹介した。こうしたハーンの功績は、昭和26年に本市が国際文化観光都市に指定された契機ともなっており、住まいとした小泉八雲旧居や作品の登場地は今でも観光客の人気スポットとなっている。

本市は、深い歴史と伝統文化に

一口メモ

よってはぐくまれてきた魅力を広く国内外に発信し、近年外国人観光客の来松も増えている。しかし、地方都市特有の人口減少、超高齢化という問題も抱えている。本市では平成29年度に松江市総合計画を策定した。基本理念を「松江を超える。松江をつくる。」とし、目指す将来像を「選ばれるまち松江」と定めた。魅力あ

古代の道を継承する松江藩の参勤交代路

律令時代の五畿七道のひとつ山陰道は、畿内と山陰諸国の国府を結ぶ官道であったが、江戸時代になると新たに山陰街道が開かれ、京から丹波を通り周防国に至る道筋となった。

現在、国道9号がほぼ律令時代の山陰道を継承しているが、益田から先は山口線に沿って津和野・山口を経由するルートとなっている。これは近世の街道に由来する。出雲街道は、出雲往来、雲州街道ともいい、播磨国姫路を起点として、出雲国松江に至る街道のことを主に指す。



る松江をもっと魅力あるまちに磨き上げ、国内外に発信して「松江」の存在感を高めていくことが必要である。そのためには市民や企業、行政などが価値観を共有し、組織や圏域、業種などの枠を超えて連携することが重要であり、「共創・協働」を基本姿勢として「選ばれるまち松江」の実現を目指していきたい。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」